

沖縄歴史の散歩道

御嶽を歩く②

沖縄復帰50周年企画として、「群星」紙上及び沖縄総合事務局ウェブサイト「オキナワンパールズ」にて歴史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を紹介します。 <https://www.okinawan-pearsls.go.jp/>



知念グスク 御嶽



園比屋武御嶽石門 (そのひやんうたきいしもん)

沖縄のいたるところにある御嶽（うたき）。創世神話にかかる「七嶽」以外にもたくさん存在しています。世界遺産となつてゐる御嶽と言えば、斎場御嶽以外に園比屋武（そのひやん）御嶽の石門があります。園比屋武御嶽は首里城正門の歓会門と守礼門の間にある御嶽で、国王外出の際に旅の安全を祈願する場所として知られています。

石門は1517年に建立されたもので、八重山の西塘という人物の手によるものとされています。しかし注意すべき点は、この石門が御嶽そのものではないという点です。御嶽そのものは石門の背後に広がる森一帯で、そこには神殿などの構築物がない空間です。石門には板の扉が設置されていますが、そこから日常的に出入りをするわけではありません。石門はいわば、御嶽とう聖域と人間の世界をつなぐ「ゲート」であり、石門は祭壇の役割を果たしていると言えます。



糸数グスク

また各地のグスクにはほぼ必ず
といつていよいほど御嶽がある点も
見逃せません。「七嶽」には首里城や
玉城グスク、今帰仁グスク、知念グ
スクに立地する御嶽があり、世界遺
産の勝連グスクをはじめとしたグ
スクにも御嶽が存在します。グスク
は単なる軍事的な「城」だけでなく、
聖域の性格も備わっていたことは
以前の記事「グスクを歩く」(本誌
5・6月号及び7・8月号)で紹介し
ました。

南城市にある糸数城は南都でも有数の大規模グスクで、万里の長城のように伸びる石垣が美しい場所です。そのグスクの内部には「糸数城之御嶽」と呼ばれた御嶽があり、自然石を乱雑に積んで囲み、石積みの内側には大きな琉球石灰岩の巨岩があります。またその脇には小さな石棺墓も存在しています。石積み囲いには王国時代の香炉と灯籠が置かれた札拝口もあって、グスクの廃城後も、集落の信仰の対象になつていました。古くから続く御

上里 隆史(うえざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ボーダーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」の時代考証を担当。

嶽の姿がうかがえる場所となつてあります。

印象的なのは、御嶽には大きくそびえたつガジュマルやクバ（ビロウ）があることです。これらは聖なる樹木として扱われていたものです。おそらく琉球の時代に植えられ、それが根付き、立派に生長した姿を現在でも見ることができます。御嶽の歴史の重みを感じさせるような光景です。

首里城内に再現された首里森（すいむい）御嶽も石積みと樹木でおおわれた小さな空間ですが、かつては内部に巨岩があつたことがわかつています。糸数グスクの御嶽と同様な空間であつたことがわかります。





今帰仁グスク 城内下の御嶽